

京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科  
2012 年度 JASSO ショートビジット派遣報告書

報告者氏名 吉村友希

2012 年度(入学・編入)

## 1. 研究課題:

ザンビア北部に居住するベンバの農村社会における生活変容と経済活動

## 2. 渡航先:

現地滞在期間: 平成 24 年 10 月 2 日 ~ 24 年 12 月 25 日 ( 85 日間)

## 3. 今回の派遣により、申請時に自身の目的としてあげた点について得られた知見を述べてください

今回の派遣の目的は、ザンビア北部に暮らすベンバの人びとの生活が、ミオンボ林の荒廃や土地の私有化や市場経済システムの定着等の国家の政策の影響により、どのように変容しているのかを明らかにすることであった。

現地では、ベンバの人びとが暮らす村に滞在し、彼らが伝統的に維持してきたチテメネ耕作と呼ばれる焼畑農耕を行う畑の面積の測定を行った。その結果、焼畑耕作による畑の大きさが全体として小さくなっていることが分かった。化学肥料を利用した近代的な農耕が広がっており、チテメネ耕作を辞めて化学肥料を利用した畑のみ保有している世帯もあった。また、チテメネ耕作が縮小することに従い化学肥料への需要が高まり、化学肥料を購入するための現金収入への需要も高まっている。現金収入源としては、収穫した作物の販売に加えて、酒の売買が日常的に行われていることが分かった。酒を提供する店も存在しており、酒が村内の経済活動の重要な要素となっていることが分かった。

## 4. 自身の今後の海外への渡航や留学に向けた課題や長期的な展望について述べてください

今回の渡航では、まずは調査地となる村を決定し、その村の世帯数や各世帯の構成をはじめ、調査村の基本的なデータの収集を中心に行った。そのため、村内の経済活動について深く調査するに至らなかったという反省がある。来年度にもう一度ザンビアの同じ村への渡航を計画しているため、次回の渡航に向けて今回収集したデータを整理し、村のどの経済活動に焦点をあて、どのような調査を行うのかをしっかりと検討し、次回の渡航では論文執筆に向けたデータ収集を着実に進めるように準備したいと考えている。また、現地語が理解できないために聞き取り調査が困難となることがあったため、次回渡航に向けて現地語の学習に力を入れたい。

長期的には、ベンバの村の社会が全体としてどのように変容しているのか、そしてその背景となっている国家政策や国際政治の動きなどを明らかにするため、最低でも年に一度は現地調査をしたいと考えている。

## 5. 本プログラムに参加した感想や、今後どのような留学プログラムがあれば参加したいか、希望をお聞かせください

今回の渡航では、今後研究を行っていく上での基礎となるような重要な調査を行うことができたため、大変満足している。このようにフィールドワークを支援して下さるプログラムがなければ、アフリカへの渡航は経済的な面で困難であるため、今後も学生の現地調査を支援するためのプログラムを継続して頂きたい。

\*1 ページを超えないようにしてください。

\* **プリントアウトして、署名を記入の上、提出してください。**

署名